

龍谷大学世界仏教文化研究センター 2016年度第2回学術講演会

講演名	亀茲国の仏教石窟壁画の図像学
開催日時	2016年6月2日(木) 17:45~19:15
場所	龍谷大学大宮学舎西翼 2階大会議室
講演者	檜山智美氏 (日本学術振興会 SPD 研究員、龍谷大学仏教文化研究所客員研究員)
司会	宮治昭氏 (龍谷大学文学部特任教授)
共催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 仏教文化研究所
参加人数	39人

【講義のポイント】

ベルリン国立アジア美術館 (Museum für Asiatische Kunst, Staatliche Museum zu Berlin) 中央アジア部門で研究員を務めた経験を持ち、中央アジアの仏教壁画の分析を専門とする、檜山智美博士による、亀茲国(クチャ)に残る仏教石窟壁画、特に壁画様式の文化的差異に関する講演が行われた。

【講義の概要】

■はじめに

中央アジアの亀茲国、現在のクチャは、かつて一大仏教文化センターとして繁栄した。現在でも非常に多くの仏教遺跡・石窟寺院が残っている。それらの多くは、イスラム教徒らによる人為的破損、地震などによる自然的破損が見られるものの、中央アジアを中心とした仏教美術を知る上で、大変貴重かつ重要なものである。

20世紀初頭には、大谷探検隊を初めとして、各国の探検隊が続々とクチャに到達した。その中でも、最も大きな成果を挙げたのがドイツのトルファン探検隊であった。その膨大な壁画断片、塑像、木彫、織物類、その他考古学的資料は、現在ドイツのベルリンとロシアのサンクトペテルブルグに散在しているという。一般未公開のものも多数存在している。

檜山氏が、クチャの仏教壁画の分析において特に重視する事柄は、「様式」「説話モチーフ」「非説話モチーフ」である。

■様式

クチャの石窟壁画には四つの「様式」が見られる。それらは「漢様式」「ウイグル様式」、そして「第一インド・イラン様式(以下、第一様式)」「第二インド・イラン様式(以下、第二様式)」である。本講演

で檜山氏は、この内、二つの「インド・イラン様式」に着目し、両者の比較を行った。第一様式の特徴としては、肉体の自然なプロポーションと三次元的な量感、暖色系の顔料が挙げられる。一方、第二様式の特徴としては、より硬化した輪郭線、平面的・装飾的効果の強調、寒色系の顔料(ラピスラズリなど)が挙げられる。そして、檜山氏は、Giuseppe Vignato 氏(北京大学)の説を受けて、「第一様式壁画に描かれた石窟と第二様式壁画の描かれた石窟は、発展的な様式ではなく、そもそも根本的に異なる文化的グループに属していたのではないか」という疑問を呈した。

■ 説話的モチーフと非説話的モチーフ

第一様式、第二様式に共通して見られる説話的モチーフは、主に三つあり、それらは 1) 仏説法図、2) 仏伝図(特に涅槃図)、3) ジャータカ・アヴァダーナ図である(檜山氏は、現在は特に非説話的モチーフの一例として「僧衣に用いられた布の種類」に関心を持っているが、このトピックについては、中央アジア学フォーラムで発表予定である)。

檜山氏は、「仏説法図」の事例として、第二様式壁画にのみ描かれている「エーラパトラ龍王の物語」の壁画を取り上げた。そして、クチャの仏教壁画に見られる視覚言語あるいは絵画的文法を用いて、そこに描かれた様々な要素を抽出し壁画に描かれた人物などの特定を行う方法を紹介した。例えば、ブツダと目線を合わせて話をしている相手は、その装飾(頭の上の蛇)などからナーガもしくは龍王ではないかと説明した。

「仏伝図」については、キジル第 207 窟の第一様式と第二様式に見られる涅槃サイクルが比較された。そして、檜山氏によって、「阿闍世王の霊夢と蘇生」が、第二様式にのみ見出されることが指摘された。

さらに、キジル第 199 窟に描かれている図像は、まさに『ディヴィヤ・アヴァダーナ』に記されているものと一致することが示された。

【議論】

講演会後半の議論で、檜山氏は、まず、クチャの石窟壁画において阿闍世王の物語は特に第二様式に多く出てくること、次に、第一様式は経典(sūtra)、第二様式は律(vinaya)に因っているというのは「仏説法図」という主題に関してのみであることを説明した。また、阿含経を重視するグループと vinaya を重視するグループがあった可能性も指摘した。さらに第一、第二によって使用言語が異なっていた可能性なども述べた。

聴講にいられていた、トカラ語専門の萩原裕敏氏(京都大学白眉センター准教授)は、講演で示されたクチャ壁画中(須弥山図)中の、ブラーフミー文字に似た文字について「これは、トカラ語の中の須弥山を表す単語の頭文字ではないのでは」と指摘した。

石窟寺院内の図像の制作などに僧侶が多くかかわっていたとすると、そこでは一体何が行われていたのか。この点について檜山氏は、僧侶の教育用であったのか、観者に説明するためのものだったのかは、今の段階では簡単に結論を出すことのできない非常に難しい問題であることを述べた。

【まとめ】

檜山氏は、何がクチャの画家たちにとって重要視されていたかを見極めることためにも、様々な図像のバリエーションをどのように収集するか重要であると主張する。また檜山氏は、「様式」「説話的モ

チーフ」「非説話的モチーフ」を三本の柱として、図像のテキスト系統、地域的な仏教文化・物質文化の反映、シルクロードの地政学的情況の反映などを読み解くという独自の方法を提唱し、今後も精力的に研究を行っていくという。

以上

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員 唐澤太輔